

「わが神、わが神、なぜ・・・」

マルコによる福音書 15章33～41節

* 「東日本大震災」(2011年3月11日)の被災者を追悼して

矢野 眞実

2011年3月18日／〔深夜〕1:04「あなたの街の駅は、壊れていませんか。時計はきちんと、今を指していますか。・・・旅立つ人、見送る人、迎える人、帰ってくる人。行ってらっしゃい、おかえりなさい。おやすみなさい。僕の街に、駅を、返してください」／2011年4月9日／23:01「ばあちゃん、何処にいますか、ばあちゃん。^{がれき}瓦礫の中で家族を探している人々よ、今夜は共に泣きましょう。共に探しましょう。共に泣きましょう。余震」／2011年5月25日／22:20「彼は、『立派な、いわきを作ってくれ』と叫んで、手を離して、まもなく海に沈んでいった・・・。助けられなかった。消防団の人々はみな、悔しくて泣きじゃくった。・・・それを教えてくれながら、〇さんも泣いた」

2011年の3月11日に東日本を襲ったあの震災の直後、わずか1週間後に、ツイッターというインターネットの会話サイトから発信された言葉の一部です。発信者は和合亮一^{わごうりょういち}さんという福島県生まれの詩人で、中原中也^{なかはらちゅうや}賞という詩の賞など、賞を幾つか受賞しておられる方です。

あれからじき、丸7年が経とうとしています。時間が経つにつれ、事の記憶が薄れゆくのはたしかに、自然の成り行きと言え言えなくもありません。しかし、そうであればあるほど、当事者の方々の声がさらにも大きく聞こえてはこないでしょうか。「どうか、この震災が風化されないように、忘れられないようにしてください。震災の記憶をどうか、風化させないでください」。被災された方々の切実な声です。ですので、7年前のその日を前にした今月、その時のことをもう一度 思い返し、聖書の言葉をそこに重ね合わせて、追悼の思いを御一緒に深められたらと願います。それはまた、単に東日本の震災だけでなく、阪神・淡路のそれや熊本・大分のそれをも思い起こすことにほかなりません。それらの被災者お一人おひとりを憶え、祈りの心を共にするということではないでしょうか。

いま一度 震災の当時に戻って、その時の様子を思い返したいと思います。和合さんは、震災直後のその状況をさらにこんなふう述べておられます。

3月16日の夕暮れ。最も放射線数値の高い福島市の部屋で一人きり、パソコンの画面を睨んでいた。・・・私は父や母や、職場があるから、福島に残ることを決意した。そして絶望していた。・・・／・・・「行き着くところは涙しかありません。私は作品を修羅場のように書きたいと思います」というフレーズを私は、ツイッターに投稿した。・・・言葉をパソコン上に投げた。／「放射能が降っています。静かな夜です」「ここまで私たちを痛めつける意味はあるのでしょうか」「この震災は何を私たちに教えたのか。教えたいものなぞ無いのなら、なおさら何を信じれば良いのか」。・・・揺れの中で「チクショウ」などと呟き、悔しさと情けなさ^{つぶや}と怒りが混ざり合ったような心地で、泣きながら、言葉を打った。・・・／・・・その夜、私から発したメッセージは、40数個になった。

関係の記事は、次のように記しました。「2011年3月11日14時46分ごろ、三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0の海溝型地震・・・が発生し、宮城県栗原市築館^{くりはらしつきだて}では震度7を記録した。この地震に伴う大津波によって、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県など、三陸沿岸から関東地方沿岸の集落では壊滅的な被害が発生した。死者数は阪神〔淡路〕大震災・・・を大幅に上回り、戦後最悪の災害となった。東京電力福島第一原子力発電所は地震の後自動停止したものの、津波により冷却能力を失い、国際原子力事象評価尺度レベル『7』の深刻な原子力事故が発生した」。そして、ちょうど1年後の2012年3月10日（土）の時点で、亡くなられた方々が15,854人に、行方不明の方々が3,155人に及んだと報告しています。大変な状況です。

ですから、和合さんの次のような呻きも当然のように思われます。

2011年4月9日／22:56「ならば、私たちは無実の罪だ。福島よ、東北よ、もういいじゃないか。せめて私たちには、牙を剥くな。私は何億もの悲しい馬たちの狂奔^{きょうほん}を、止めたいのです。たてがみを優しく撫^なでてあげたいのに」／2011年3月24日／22:47「心のいちばん悲しいところに吹き止まない風と今がある」

こうした悲しみや呻きに取り囲まれて、私たちはやはり、問いたくなります。やはり、問わずにはおれません。「神様、なぜなんですか。どうしてなんですか」。実際、そのように問いかけ、信仰を捨て去った人たちも少なくありません。第二次大戦中の、ドイツのナチによるユダヤ人の大虐殺。罪のない者たちが次々と殺されていくその様を目の当たりにして、エリ・ビーゼンというユダヤ人の作家はユダヤ教のその信仰を捨てました。1986年にノーベル平和賞を受賞した、著名な作家です。また、数学者にして大道芸人というユニークなキャラから、かつて私たちのテレビにもよく登場したピーター・フランクル。彼はユダヤ人で、その父親もまた、ビーゼンと同じような理由から、その信仰を捨てたのでした。「直接 責任のない人々がなぜ、こんな目に？ 直接 罪のない

人たちがなぜ、こんな悲惨な目に？ 神はどうして、こんなことを許されるのか」。理屈の通らない、そのような不条理です。小さな子どもですら、筋の通らないその理不尽さは分かります。「教えて、どうして 日本の子は悲しい思いをするの？」と、7歳の女の子がローマ法王に質問をしたといいます。「質問したのは千葉市に住むエレナ・マツキさん（7）・・・。自宅マンションのベランダで撮った日本語のビデオレターで尋ねた。／〔イタリアの〕ベネチア近郊に住む祖母ジアーナ・デル・リオさん（63）によると、エレナさんは地震発生時、10階の自宅に日本人の母親と一緒にいて、強い揺れを何度も経験。同年代の子どもがたくさん亡くなったことを知り、法王に質問をしたような疑問を抱いたという」。そう、新聞に掲載されていました。

そして、こうしたとき 必ずと言っていいほどに姿を現わすのが、どこかいかかわしくもある人たちではないでしょうか。難病で入院生活を続けておられたクリスチャンの知人が言っていました。「難病になったとたん、どこから聞きつけたのか、新興宗教の妙な人たちがあれこれやってきて、自分たちの宗教に引き入れようと勧誘されましたよ」。ことは、妙な新興宗教だけの問題ではありません。東日本大震災のとき、キリスト教の組織や団体からも一部、眉をかめざるをえないようなアピールが飛び交いました。例えば、次のようなものです。そこには「東日本大震災が日本に与えたピンチをチャンスに」と、タイトルが付けられていました。

3月11日は日本人の価値観を根底から揺さぶる日となりました。・・・皆さんは、この大震災を通して主がいったい何を日本に計画されていると思われたでしょうか。

一つはこの大震災が日本に対する霊的警告の意味を持っているということです。・・・今回の災害の中に、日本に対するそのような警告的裁きの意味が含まれていると思います。

次に思わされたことは、日本に対する神様の哀れみと救済のご計画が含まれているということです。・・・人は試練に会わなければ神に助けを求めることはほとんどありません。

更に・・・日本の教会を目覚めさせるための災害だったということです。・・・終わりの時代の大収穫が日本にも来ることを信じて待ち望んできましたが、今回がそのきっかけになればと祈っています。

日本人たちが他国の人たちよりも罪深かったと言うのでしょうか。福島や岩手の被災者の中には善良な人が一人もいなかったとでも言うのでしょうか。でなければ、どう理屈をつけようとも、「見せしめ」に人を殺す神ということにならざるをえません。聖書のイエス・キリストからなんとかけ離れた神の姿なのでしょうか。事実、イエス様御自身、次のように言い切っておられます。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない」（ルカによる福音書 13章2～3節）。「シロ

アムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない」(同 4～5 節)。「(この人が生れつき目が見えないのは) 本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」(ヨハネによる福音書 9 章 3 節)。ルカとヨハネの福音書に記されています。細かな検討は省きますが、いずれも、災難に遭ったのはその人たちが罪深かったからだという世間の決めつけを、主イエスが明確に退けられたものです。実際、被災したのがこの私たちのこの私であっても決しておかしくなかったはずです。なぜ、この私たちでなくて、東北のあの人たちでなければならなかったのか。筋道を立てて考える賢明さもなければ、人の悲しみを想う感受性も、また 聖書を正しく読み取るその読解力も欠けていると言わざるをえません。

理解に容易でない理不尽で不条理なことがどうして、私たちのこの世界に起こるのか。ここではその詳しい議論は省きますが、しかし結局のところ、誰もが納得できるような そのようなはっきりした理由や原因は分からないのではないのでしょうか。先ほどの女の子の質問を受けたローマ法王も、こう答えています。「私も自問しており、答えはないかもしれない」。さらにはまた、すでに天に召されましたが、日本キリスト教団の故・清水恵三しみずけいぞう牧師のこんな言葉もあります。教会の牧会者として、また農村伝道神学校の教師や校長代理として、多くの働きを担われた先生です。「・・・それだけが原因だと、確信に満ちて言いすぎる宗教的表現は危険信号と思ったらよいでしょう。人間が神さまになりかわったような態度や言葉を示す時は、頼もしいようにみえて、まやかしの多いのです」。これもまた、覚えておくべき言葉のように思います。

なぜ、こんなことが起こるのか。どうして、そんなことが起こるのか。それは最終的には結局、分からないことが少なくないのではないのでしょうか。けれども、見通しのよく利かないき そんな霧のような中でもなお、「慰め」はある。「救い」や「希望」の源はあるように思います。少なくとも私は、聖書からそう示されています。それは、イエス・キリストがその同じ叫びを叫ばれたということです。「わが神、わが神、なぜ・・・」(34)。主イエスもそう叫ばれたのでした。

これは、旧約聖書の詩編 22 編の冒頭の言葉に重なる叫びです。そして、詩編のその文脈も一つの可能性として、「主イエスのこの叫びはいったい、何だったのか。神の独り子がこのような言葉を口にするとはい・・・」と、これまでもいろいろと議論がなされてきました。「詩編 22 編は、神を賛美し、その恵みの御業みわざを告げ知らせるとの言葉で終わっている。イエスはそれを口にしたのであり、もしかすると、冒頭の言葉で 22 編の全体を言い表わそうとされたのかもしれない」。こうした諸説も含め、実際 今なお、どう考えたらいいのか、解釈のとりわけ難しい箇所の一つとなっています。その意味で、皆さんの忌憚きたんのない御意見、御感想をお聞かせいただければうれしく思います。

ただ、そのようななかにあっても、イエス・キリストの叫びから色濃く響いてくるのはやはり、落胆の色合いであり、孤独や絶望の色調ではないだろうか。この私には、そう感じられてなりません。

そして、それはまさに 理不尽への呻きであり、不条理への叫びのように思われます。「自分はここまで、ひたすら あなたの御心みこころに生きることを旨としてきた。悪を思わず、行なわず、人々からもあなたからも責められるところはないはずなのに、なのに どうして・・・」。そんな理不尽に対する呻きであり、独りっきりの孤独です。いみじくも、「全地は暗くなり、それが三時まで続いた」と、マルコ冒頭の 33 節はそう語っています。同じ場面を記したルカによる福音書の 23 章はこれに続けて、「太陽は光を失っていた」(ルカ 23:45) と、言葉をそのように加えています。十字架の周りが「闇」に包まれた。「闇」が主イエスを覆ったのでした。

そこに「何」を見るか。イエス・キリストのこの御姿みすがたに、私たちはいったい、何を見て取るでしょうか。私は、全く「人間そのもの」となられた主イエスの御姿をそこに見る思いがしています。隅から隅まで残りなく、この私たちそのものとなってくださったイエス・キリストのその御姿です。罪がないのに、なのにあえて、バプテスマのヨハネからバプテスマをお受けになられたイエス・キリスト。そのようにして 私たちと同じようになってくださった主イエスのお姿の極みが今、ここにある。そう思われています。イエス・キリストは今、孤独のうちに、独りっきりで死に赴こうとしておられます。独りぼっちで死ぬ。それは悲劇の中の悲劇であり、これ以上の悲しみのないことを、知る者は知っています。そのようにして、主イエスは私たち・人の悲しみと苦しみのすべてをその身に受け止め、私たち・人の理不尽と不条理のすべてをその身で味わわれたのではないのでしょうか。そして、独りっきりの絶望にまで踏み入ってくださった。どん底のその底まで抜けるような、そんなところにまで落ちてくださった。そこに一緒にうずくまってくださった。「わが神、わが神、なぜ・・・」という叫びは、まさに その「しるし」ではないのでしょうか。

人はたしかに、一人で生まれ、一人で死んでいきます。しかし なお、私たちは独りではありません。「わが神、わが神、なぜ・・・」と叫んでくださる主イエスがそのようにして、何とも分からない理不尽や不条理のそのところにまで寄り添い、共にいてくださっているからです。それは、何とも大きな慰めではないのでしょうか。「救い」ではないのでしょうか。私たちは独りぼっちでないからです。

そもそも、イエス・キリストは御自身のすべてをかけて、父なる神の御心に生きられました。そうした徹底した信頼がなかったなら、このような叫びなど出てこようはずがありません。私たちのように ほどほどにいい加減に生きていたなら、徹底した闇を見ることもなければ、叫ぶこともなかったでしょう。その真理を、アメリカのユニオン神学校で教授を務められた小山晃佑こやまこうすけという著名な神学者が次のように述べておられます。

十字架上でキリストは苦悩のきわみの一言ひとことを言いたもうた。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ福音書 一五・34 [口語訳])。・・・イエス・キリストの神への信仰が深ければ深いほど、その苦しみは深いものであったと私は想像する。もし 神とキリストとの関係が浅薄なものであったのなら、捨てられるという事件はそんなに キリストにとって苦しみではなかった [ろう]。しかし、じつに

深い関係であったキリストが神に捨てられたとき、その暗黒は極度のものではあったと考
える。

・・・こんな〔にも〕心をゆさぶる真実があるだろうか。

しかも、しかもです。しかも、主イエスはこれにとどまりませんでした。これにとどまらず、その
先にもう一步、踏み込まれた。そして、そこにおいてこそ、全く人間となってくださったイエス・キ
リストがまた同時に、まさしく「神の独り子」でもあったことが明らかになったように思うのです。
それは、光のかけらすらない「真つ暗闇」のそのところに、なおも「光」を見るということです。光
の全く見えない十字架の闇の中で、イエス・キリストはなおも光を信じ、それを見たのでした。「わ
が神、わが神、なぜ・・・」と、イエス・キリストは叫ばれました。がしかし、聖書はそれだけ
でなく、その主イエスがもう一度、大声で叫ばれたことを記しています。37 節です。そのとき、主
イエスはいったい、何と言って叫ばれたのでしょうか。先ほど御紹介したルカによる福音書の 23 章は、
46 節でこう述べています。「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊を御手にゆだね
ます』。こう言って息を引き取られた」。これはスゴイことではないでしょうか。とんでもない
ことではないでしょうか。それがたとえ風前の灯火^{ともしび}であっても、光のあるところに光を見るのなら、
すなわち 希望のあるところにそれを見るのなら、私たちにもできないことはありません。しかし、
真つ暗闇で、光のかけらも何もない。そんな光の全くないそのところで、すなわち 希望の全くない
そのところで光を見、希望と救いを信じる。それは、人にできることではない。神の御子^{みこ}にして初め
てできることではないでしょうか。イエス・キリストはそのようにして、光のない真つ暗な十字架の
闇の中でなお、父なる神の救いを見、その御手^{みて}に自らを委ねたのでした。これを信仰の極みと言わず
して、何と言うのでしょうか。これこそ、信仰の真髓、信仰の信仰、真^{まこと}の信仰と言えはしないで
しょうか。先ほどの小山先生はその言葉を続けて、信仰のこの真理を次のように言い表わしておられ
ます。

叫んでも、暴風が去らないときにも信ずる信仰！

「エロイ、エロイ、〔ラマ、〕サバクタニ」〔口語訳〕・・・。これは恐ろしい話です。
叫ばれたのに見捨てられたというのです。これ以上恐ろしい話が一体あるでしょうか。
〔しかし〕ここで信仰ということが頂点に達したのではないのでしょうか。それは・・・
信仰告白が最も高められた驚くべき瞬間であります。主は神を信ずる者として—最も
深く信ずる者として—最後の息を引きとられ〔たのでした〕。

「ああ、なんという偉大な信仰であろう。見捨てる神を信じるとは！」 宗教改革者の
あのルターもそう言って、この信仰の奥義^{おうぎ}に感嘆したといひます。「ああ、なんという偉大な信
仰であろう。見捨てる神を信じるとは！」

そうです。このイエス様が一緒にいてくださっているのではないのでしょうか。何とも言いようのな

い、何が何だか訳の分からない、そんな この世の理不尽と不条理のそのところに、このイエス・キリストがいてくださっている。無念の中に深く深く沈められていった 理不尽と不条理の犠牲者のそのところに、この主イエスが一緒にうずくまってくさって、そして、何一つ見えない真つ暗闇のその向こうになおも見えない光と希望のあることを信じさせてくださる。そのようにして、うずくまってへたり込んでいる者の手を取って引き起こし、暗闇の向こうへと引き出してください。私はそう思わされています。そのようにして そこにも「救い」が置かれていることを信じる者の一人です。たとえ この世の矛盾に^{もてあそ}弄ばれようとも、最後の最後まで、なおも独りぼっちでない世界がそこにあるのではないのでしょうか。この慰めを、この救いを、この光と希望を、心ならずも東日本の大震災にみまわれた無実の方々の上にも祈り求め、そして信じたいと 私は思っています。なぜならば、その声は聞こえず、姿は見えなくとも、十字架の上のイエス様の傍らには父なる神が確かにおられたからです。いてくださったからです。イエス・キリストは見捨てられてはいませんでした。だからこそ、主イエスは3日目に復活を与えられたのでした。

光の見えないそのところに、なおも信じて 光を見る。そのようにして、混沌^{こんとん}の闇のただ中に、なおも信じて 神のいのちと救いを見える。それはまさに、聖書の初めに置かれた 神の創造^{みわざ}の御業にほかならないように思われます（創世記1章）。

これが、東日本の大震災を思い返すときに、また阪神・淡路や熊本・大分の震災を思い返すときに、私が聖書から示され、祈らされていることです。皆さんのお考えやお祈りもお教えたいただければ幸いです。

しかしながら、終わりに短く、2つの問題に触れねばならないように思われています。もしかすると、それらはこの私たちにとってより身につまされる身近なこととして、さらにも本質的な事柄かもしれないかもしれません。なぜなら、それらはまさに、日常的な「すぐそこにあること」だからです。

それは一つに、東日本の大震災はその大きさにおいて たしかに未曾有^{みぞう}の震災ではあったものの、しかし よくよく考えてみると、同じように理不尽で不条理な 降って湧いたような災いはこの私たちのすぐそばで日常的に起こっているのではないかということです。そもそも、地震や津波といった天災からして、規模こそ違い、何度も繰り返して起きています。私たちはこれまでも数多く、それらにみまわれてきました。しかも、身近な「小さな震災」とでも言えるようなものは繰り返し、この私たちに降りかかってくるのではないのでしょうか。私は今でも、決して忘れられません。30代の半ばという、これから楽しく充実した家庭生活をとというまさにそのときに、夫を突然 奪われた知人の Aさん。前の夜、いつものように何事もなく眠りについた夫が、朝になってみたら、原因も分からないまま冷たくなっていました。小さな子どもさんと妻を残して、突然 いなくなってしまう。また、若い盛りの20代の娘さんが これまた、ある日突然、理由も分からないままに 重い鬱^{うつ}を発症。入院先の病院でついには、自ら^{みづか}自分の命を絶ってしまいました。そのようにして娘さんを亡くされたお母様の Bさんのことを思い起こします。そして さらには、予定日の直前に またまた原因も分からないまま、生まれ出る準備のすべて整ったおなかのその子を失ってしまった Cさん。こうしたあれ

これの不条理に何度 涙し、そのやりきれなさにどれほど悲しみ痛んだことでしょうか。このように、大震災に比べればたしかに小さくはあるものの、理不尽な震災もどきは私たちのすぐ身近で、すぐ傍らでも起こっているのではないのでしょうか。そこにイエス・キリストがいてくださらなくて、どこにいてくれるというのでしょうか。大きな震災を契機に、誰の日常にもある こうした小さな震災にいま一度 思いを向け、心を震わせる私たちでありたいと思います。そして、そのような いわゆる日常の災害の中で互いの痛みや悲しみに心を向け合い、大切に思い合う私たちでありたいと願います。

そして あと一つは、隣り人を思う そうした思いが誠実なものとなることを祈り求めるということです。それは、よく言われる次のような言葉に示されている 私たちの現実からきています。すなわち、「遠くの友人は愛せるが、近くの隣人は愛せない」という、私たちのその現実です。大震災にみまわれた被災者の方々に心を注ぎ、必要な支援をすることは 当然のこと、なさねばならないことでしょう。けれども、私たちはそのようにして 遠くの被災者に心を寄せながらも、しかし、その一方で すぐ隣りのあの人・この人といがみ合い、心を離してしまう。この私も含め、そうした現実がないだろうかということです。実際、被災者の方々と毎日 顔を合わせ、生活を共にする関係になったとしたら、あるいは 同じように歓迎されざる思いが生まれてこないともかぎりません。であるなら、こうした時を契機にし、ここでもまた、すぐ近くの・すぐ隣りのあの人・この人にも心を寄せ、私たちの隣人愛を多少なりとも誠実なものにしていきたいと祈らされています。そのような者に内側から変えていただくことを主に祈り求めることで、震災への支援もまた、より真実なものとしていくのではないのでしょうか。それは私たちにとって、十字架のあのイエス・キリストを頂いて初めて起こされることのように思われます。

そのようにして後、私たちは一編の詩に心の耳を傾けたいと思います。「最後だとわかっていたなら」と題された詩で、子どもを亡くしたアメリカの女性が作ったものです。あの 9.11 の同時多発テロ事件でも朗読された、心を打つ詩です。

「最後だとわかっていたなら」

あなたが眠りにつくのを見るのが／最後だとわかっていたら
わたしは もっとちゃんとカバーをかけて
神様にその魂を守ってくださるように／祈っただろう
あなたがドアを出て行くのを見るのが／最後だとわかっていたら
わたしは あなたを抱きしめて キスをして
そしてまた もう一度呼び寄せて／抱きしめただろう・・・
たしかに いつも明日はやってくる
でももし それがわたしの勘違いで／今日で全てが終わるのだとしたら・・・
・・・わたしたちは 忘れないようにしたい
若い人にも 年老いた人にも／明日は誰にも約束されていないのだということを・・・

明日が来るのを待っているなら／今日でもいいはず
もし 明日が来ないとしたら／あなたは今日を後悔するだろうから
^{ほほえ}微笑みや抱擁やキスをするための／ほんのちょっとの時間をどうして惜しんだのかと
忙しさを理由に
その人の最後の願いとなってしまったことを／どうして してあげられなかったのかと
だから 今日
あなたの大切な人たちを／しっかりと抱きしめよう
そして その人を愛していること
いつでも／いつまでも大切な存在だということを
そっと伝えよう・・・

この詩は実は、妊娠 3 カ月の 29 歳で東日本の大津波に飲まれて命を失った ^{りくぜんたかたし}陸前高田市の一人の女性がその 2 年前に、福祉の講演会で朗読していたものでした。その詩を手にし、ふとしたことから その事実を知った女性の御両親がしみじみとこれを読み、そこに娘の声を聴き取ります。そして、今は亡きその娘さんに語りかけるのでした。「東日本の人たちの手助けをしてきたよ。天国で赤ちゃんと安らかにね。最後だとわかっていたなら・・・」。「明日は誰にも約束されていないのだ。だから 今日、大切な人たちをしっかりと抱きしめよう」。朗読された詩は、そう語りかけます。だから、私たちも同じように、家族の一人ひとりと、友人の一人ひとりと、そして大切なみんなと 心を誠実に寄せ合いたい。そう願い、また そう祈らされています。

2011 年 5 月 25 日／23：01 「お前は、この震災で何を見た」

和合さんは、そう問いかけています。私たちはイエス・キリストと共にあるその信仰においてこの問いかけを聞き、そして それに答えていきたいと思えます。「お前は、この震災で何を見たのか」。私たちはいったい、そこに何を見るのでしょうか。

〔交禱〕

説教者：わたしたちと悲しみを共にしてくださる主キリストと共に、父である神に祈りましょう。

司会者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。

それは、不慮の死を迎えた犠牲者たちの声だからです。

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

司会者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。

それは、愛する人を失った悲しみの中にある人たちの声だからです。

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

司会者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。

それは、放射能の脅威によって故郷から離れなければならなくなった人々の声だからです。

会衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

司会者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。

それは、被災した方々に寄り添うために心を尽くしている人々の声だからです。

会衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

説教者：恵み豊かな父よ、苦しみと悲しみの中からあなたに叫ぶわたしたちを顧みてください。あなたの慈しみ深いはからいに、いつも心から信頼することができますように。

わたしたちの主イエス・キリストによって。

一同：アーメン

(日本キリスト教協議会、カトリック中央協議会編 式文『東日本大震災一周年にあたり、追悼と再生を願う合同祈祷集会』より抜粋。一部変更)